

Title	World Congress of Philosophyに参加して (7月30日 - 8月5日、ソウル大学)
Sub Title	
Author	飯田, 隆(Iida, Takashi) 林, 晃紀(Hayashi, Akinori) 植村, 玄輝(Uemura, Genki)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.5, (2008. 10) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000005-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

World Congress of Philosophy に参加して (7月30日-8月5日、ソウル大学)

1. 慶應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」からの援助によって、慶應義塾大学文学研究科哲学・倫理学専攻に所属する8名の大学院生が、7月30日から8月5日にかけてソウル（韓国）で開催された第22回国際哲学会議(WCP2008)に参加し研究発表を行いました。

100年以上の歴史をもつこの会議がアジアで開かれるのは、今回がはじめてです。それだけに、開催者の意気込みも大きく、昨年秋には、日本からの参加をよびかけるために、韓国の組織委員会代表がわざわざ来日され、それを受けて慶應でも COE 企画で説明会をもちました。その成果もあって、今回、多くの大学院生が発表を行ったのはよるこばしいことでした。

参加者のうちの二人に、会議の様子や印象などについて書いてもらいました。二人とも、韓国の大学院生の人柄と学力に大きな印象を受けたようです。

今回の経験を契機として、これから、韓国の哲学界との交流も深めて行きたいものです。(飯田 隆)

2. 今回、私は、韓国のソウル大学 (Seoul National University) において開かれた第22回 World Congress of Philosophy において発表をしてきました。この学会は5年ごとに開かれる、世界規模の哲学の国際学会です。参加者は1800人以上、参加国は102ヶ国、開かれたセッションは、実に498に及ぶ、哲学の学会としては、異例の大規模な学会です。哲学の分野に関しては、古代哲学から現代哲学、東洋哲学から西洋哲学とありとあらゆる分野の研究者が集まりました。

会場となったソウル大学は、ソウル中心地から南の郊外に位置し、山ひとつを丸ごとキャンパスにしたような広大な敷地を有しています。そのキャンパス全体を使って学会は開催されました。

この学会は、ソウル大学の哲学科のみによって主催されたのではなく、韓国政府、様々な企業の共催、多くの学生ボランティアの協力によって開かれました。開会式に際しては、韓国の伝統音楽の演奏がなされました。民族衣装が色鮮やかなのが印象的でした。また、韓国の首相が、SPを従えて入場し、開会のスピーチを行うなど、韓国政府の全面的なバックアップがあったように思います。

さて、私が参加したセッションは、Modern Philosophy と呼ばれるセッションです。各セッションに5人程度の発表者が、順次発表し質疑応答を受ける形でした。私と同じセッションには、韓国、フランス、アメリカの研究者が一緒に、私と同じくデカルトについての研究発表を行いました。私の参加したセッションの前の時間に行われたカントのセッションに比べて、聴衆の数が少なかったのが残念でしたが（やはり、デカルトよりもカントについて関心を持っている人のほうが多いのでしょうか?）、地元韓国のオーガナイザーがうまく議論をまとめてくれて、参加者の間で活発な議論ができました。

発表の内容に関しては、韓国の研究者が、デカルトの数学の哲学に関して発表し、アメリカの研究者は、デカルトの心の哲学について発表していました。私自身は、デカルトの著作のスタイルから彼の哲学的目論見を読み取ることを主眼とした論文を発表しました。したがって、同じデカルトについて話をしていても必ずしも話題が重なっているというわけではないのですが、かえって自分が知らない話題に触れることができたことは有意義なことでした。自分の知見を広げることや自分のデカルト解釈に関して、今後の研究に役立つ批判をいただきました。

その会場で私が知り合いになったアメリカ人のデカルト研究者

は、Pittsburg University で Ph.D を取得し、現在 California State University, Northridge で教鞭をとっている若手の研究者でした。彼は、私がシカゴ大でお世話になった先生に習ったことがあるとのことでした。また、彼が、現在教えている Northridge の哲学科の Chair をされている八木沢氏は、慶應にも何度か発表にいらしたことがある哲学者です。偶然とはいえ、哲学の世界は狭いものだと感じました。

最後に、ソウル大の学生ボランティアは、素晴らしかったと思います。彼らの多くは英語や日本語をうまく話し、とても親切に対応してくれました。もし、日本で同様の学会があったなら、これほどうまくいったらどうかと、日本の大学教育のあり方を考えさせられる経験でもありました。(林 晃紀)

3. 私は、「現象学 (Phenomenology)」セッションにて、フッサールの言語哲学についての発表を行いました。現象学セッションは、大会初日・二日目にあつたのですが、両日とも追加の椅子が用意されるほどの盛況ぶりでした。また、Dermod Moran (アイルランド)、George Heffernan (アメリカ) といった、現在も第一線で活躍する研究者が出席していたことも相まって、和やかでありつつも引き締まった良い雰囲気なかで、セッションが進行しました。

個別の発表は、だいたいどれも、「立ち入った話をする代わりに、話題をかなり限定するタイプ」か、「研究の大枠について、大づかみな話をするタイプ」のどちらかですが（他のセッションについても、事情は同じだったようです）、いずれの場合にも、活発な議論が交わされていました。私自身の発表は、前者の部類に属するものだったのですが、聴衆の多さに加え、予定よりも長い持ち時間（一人あたり約25分）が与えられたため、十分な質疑応答を行うことができ、非常に実り豊かなものになりました。

その他の個人的な収穫としては、すでに言及した方々に加え、Arkadiusz Chrudzinski (オーストリア/ポーランド)、Jean-Claude Gens (フランス) といった、これまでの私の研究で仕事を参照してきた研究者と知り合えたことが挙げられます。自分自身の研究について、彼らからのコメントを得られたことは、大きな刺激であり、今後の研究人生にとって重要な出来事になったように思います。

大会初日に自分の仕事を終えることができたため、残りの数日は、さまざまなセッションやラウンドテーブルに顔を出すことができました。そのなかでもとりわけ印象的だったのは、英語圏の分析哲学者によるプレゼンテーションの上手さです（例外あり）。要点だけを明晰に伝える発表の実例を目にすることができ、多くを学ぶことができました。

また、韓国の大学院生との交流も、私にとってたいへん有意義な出来事でした。極東アジアで西洋哲学を研究しているという大きな共通点があるだけに、彼らと私たちの違いは、興味深くありました。例えば、これは単なる個人的な印象かもしれませんが、韓国の大学院生の多くは、私（たち）よりも、英語での議論にとっても慣れている様子でした。ひょっとするとこれが、今回の学会で得た、もっとも大きな刺激だったかもしれません。

(植村玄輝)

